

### 断想 : 経済学史研究 : 旧友への手紙

HIRABAYASHI, Chimaki / 平林, 千牧

---

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei University Economic Review / 経済志林

(巻 / Volume)

74

(号 / Number)

1・2

(開始ページ / Start Page)

3

(終了ページ / End Page)

19

(発行年 / Year)

2006-08-28

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00006121>

# 断想：経済学史研究

——旧友への手紙——

平 林 千 牧

## 1 はじめに

Eさん、久しぶりにご返事方々お便りをさせていただきます。

今年の正月、『三田評論』より依頼を受け、ごく短文の教育関係に関わる随想のようなものを書きました。アダム・スミスの《division of labour》を材料にして、現代の divide という問題に関し、かつてわれわれがスミスの学問の体系的理解について議論したことを思い出しつつ、印象的なことを記しました。

お手紙によりますと、仕事の忙しさはともかく、やはり市民講座で自分の専門について話をする機会が多く、いつも苦勞しておられるとのことでした。そこで、この（今の）時代と、われわれがスミスを抱っていた時代の違いを背景に、スミスのおもしろさを何とか伝えてみたいということですが、率直に言いまして、それはなかなか難しいことのように思えます。

じつは、『三田評論』の随想は、大学改革に関連させつつ書くべきだったようですが、改革を随想的に扱うと、どうしても一種苦勞話になりがちなので避けようと思い、スミスにしたというわけです。その折に、お便りの趣旨とほぼ同様のことを考えて、短文にまとめた次第です。単なる随想でしたので、特にお目通しいただくほどのものではありませんでした。改めて幾分か参考になればというわけで、お送りさせていただきます。

Eさん、お手紙をいただいたついでにというのでは申し訳ありませんが、そして、今は割合近くに生活しながらなかなかお互いに会う機会を持ってないというわけで、メール便利用で幾分長文になりますが、私なりにEさんのテーマに関するいわば周辺事情のような、というよりそうしたテーマを巡る思い付きのようなことを書かせていただきます。ひょっとすると、多少はご利用いただけるかもしれません。

小生は、最近ではご存知のようにこの分野を論文で扱うことはないはずです。しかし、現代を考える際に、まったく過去の研究を材料にするアイデアがない、ということになるわけではないでしょう。基本的にはわれわれの過去を振り返りつつ、ということになると思います。かつて時永先生を中心に、日がな一日議論していたことは、もちろん時代的背景あるいは広い意味で或るパラダイムの中にいたわけですから、そうした影響を免れなかったと思います。

しかし、他方でわれわれはずいぶんプラグマティックかつ自由奔放、言い換えれば勝手気ままに議論していました。これがとてもよかったはずです。ある時、国内の政治的対立がかなり先鋭化していた折にも、あれやこれやの言説の後で、やはり自民党を良くするプロジェクトを考えたほうが早道だ、というようなことにもなりました。半ば世の中を冷やかしていたということですが、後に小泉首相が出てきたわけですから、やはりある種の先見性はあったのかもしれません。

というわけで、われわれの過去の議論は（今の）この時代にも参考になることは含んでいるはずです。また、私自身についていえば、一時期原理的な領域だけに絞って研究を進めようかと思ったこともあります。そして貴兄も含め入れ替わり立ち替わり予想外多人数で議論を重ね、基本ストーリーを整理して、この分野のわれわれの考え方を小生編の著作として纏めました。研究としては非常に面白かったと記憶していますが、どうもやや思考上のタイプとでもいうのでしょうか、われわれ一同、理論にのめりこむということにはなりませんでした。

幾分冗談めきますが、言ってみればわれわれの師匠は、学説史に対し方法論というものを大上段に振りかざして進みだしたわけですから、われわれとしても引込みがつかなかったともいえましょう。しかし、結局こちらの方がわれわれの肌に合わせていたということでしょう。実際、今も変わらずこの分野に最大の愛着を感じているとって間違いありません。

## 2 恩師の格言—学問は節度である

Eさん、当時のわれわれの問題意識は、基本的には宇野先生の理論を学説史的に検討すると、どのようなテーマが軸心に位置づけられるのか、ということだったと思います。時永先生が、「経済学史の方法」に対しその科学的裏づけを試みていた、ということと関係していました。先生は、結局宇野先生の原理体系を背景に持ち、ここに経済学の「科学性」を据え、諸学説の科学的体系の成立過程を展開するという考え方を提出されていました。

その際、何をもって体系的成立過程の端緒とすべきかは、かなり重要なことでした。というよりむしろ学説史に何らかの体系的叙述を与えなければならないという点からしても、それは決定的に重要のように思えました。そこでわれわれは、学説史の端緒をどのように設定しようかと議論をしていたはずです。

Eさん、われわれの考えでは、理論としても人物としても、スミスをそこに据えることには、大方異論がなかったと思われます。われわれの中には、ケネーを主張する人はいませんでした。しかしその理由となると、われわれの間でも幾分違いがあったのではないのでしょうか。やや強引にわれわれの違いを浮き出させて見ると、このように整理できるかと思われます。どちらかという、1) 労働価値論重視の立場、2) (学説の主張者としての人物ではなく、理論的な人間像の設定としての) 個人重視の立

場、そして3) 社会像重視の立場、ということになるでしょう。

これらの違いは、じつは学説史の理論的端緒に何をもってくるのかの違いというより、その端緒をもって学説史を展開していく際の動因についての取り上げ方の違い、といってよいでしょう。というのは、結局、われわれはスミスの以下の規定、すなわち、“Labour was the first price, the original purchase-money”を、学説史の端緒に持ってくることには意見の相違はなくなったはずだからです。

「労働こそは、本源的購買貨幣である」というスミスの見地を、スミス経済学の要とするという考え方が、どのスミス研究者にも共通するとは思えなかったと思います。われわれが特にこの点に注目したのは、やはり時永先生の方法論に強く影響されていたためでした。先の区分のうち1)の労働価値論重視の立場は、当時の論争の中で「労働価値論はいかに論証されるべきか」という方法論の問題があり、宇野先生の主張の重要な論点であったことに由来していました。「体系」、言い換えれば原理的システムということになりますが——これは時永先生がよく使った表現でした——、これをいかに根拠づけるかということになると、この「いかに論証されるべきか」にかかっていると理解すべきであるという主張になったわけです。

Eさん、小生の記憶ですと、あなたはこの主張に近かったのではないのでしょうか。というよりむしろそれを、もっとも強く支持されていたはずです。もちろん、私もこの視点について重要だと思っていました。ですから、自分の論文を纏めた『古典派経済学の基層』では、構成の出発点をその点に絞っています。スミスからマルクスまでの古典的理論についてみれば、この立場は学説の流れを旨く説明できると考えたわけです。

もっとも、自分の著作についてみれば、はなはだ奇妙な構成になっていると思っています。学説の流れについてその本流の始点にこだわったため、重商主義などについては、補論的に後回しになってしまいました。通

常とは異なる順序になりましたから、変だねなどとも言われましたが、自分としては学説史の始点に拘った以上、止むを得ない構成だと抗弁していました。

もっとも、あの時期われわれは共通していましたが、経済学の時論的論文あるいは抽象度の高い現代経済学的議論があると、それを材料にいわば学説史的な味付けをする論文などを書いていましたから、例えば重商主義を取り上げるにしろ、それは学説史固有に議論したというより、問題を少し位置をずらして取り上げるとどうなるかというような性格でした。したがって、論文の色合いはやや遊び風あるいはシニカルになっていたでしょう。

いずれにしろ、自分の論文をほぼ1)の考え方で纏めたのですが、私自身が重視していたのは2)の考え方でした。これは、Eさんが覚えておられるかどうかわかりませんが、時永先生の還暦記念論文集『経済学説史研究』を出版した折に、先生によって指摘されました。論文集に執筆した個々の論文について先生は批評したわけですが、私の論文についてこのように指摘しました。私の論文はもちろんスミスについてでしたが、これは少し思想的側面が強いのではないか、というものでした。

Eさん、先生の指摘は的を射ていました。思想的と表現されたことにはやや違和感がありましたが、これはスミスその人にあまりにも身を寄せすぎているという指摘であろうと思いました。論文で私が強調しようとしたことは、こういうことでした。つまり、スミスの一貫したテーマは何かを考えた場合、もっとも明白なことは、彼は「個人が社会を成す」秘密をどう説くか、に焦点を定めていたとみてよいだろう、というものです。これは、おそらくスミスその人だけに限定すると、誰も文句は言わないということだろうと思います。論文の批評会のようにであった出版記念の折にも、先生の指摘ともども出席者一同そのような理解だったと思います。

少し補足しますが、実はこの折、私としては何か少し意識のずれを感じ

たように思います。それは、学説史の方法とまでは言えないまでも、方法の構造のような性格にあることなのですが、要するに諸学説のストーリーを可能にするあるいはコンシステンシーを与える叙述に関することでした。時永先生の方法論にも関係するのですが、われわれには原則がありました。超越的な学説検討・批判は行わないということで、そのため、各学説の理論そのものに徹底的に即するということになっていました。

物事を内在的に取り上げようということだったわけですが、体系成立史はいわば設定した目的にしたがって先験的に方向性を与えているというような側面があり、個々の学説を取り上げた際に全体の統一性と個々の学説・理論とに微妙にずれが生ずることがあり、これをどう扱えばよいかということです。私の記憶では、Eさんも別の機会にそのような趣旨の議論をされていたのではないのでしょうか。時永先生はこの点では比較的強引であったように思います。

自分の論文について長々と補足するという場ではなかったこともあって、私は必ずしもスミスだけのことでなく、もっと長いスパンでそう捉えるべきだという自分の考え方を言いませんでした。ただこう発言したことは覚えています。個人に力点を置くことは、必ずしも思想的な側面の強調ではない、個人の可能性の闡明こそが社会科学の最終的課題になるだろう、という視点についてです。

最近のことに触れるのはお便りの趣旨と違うのですが、よくご存知の通り、現代理論の中でも行動経済学というような考え方が注目されています。新古典派的個人に対する一種のアンチテーゼということになりましたら、制度派とか進化経済学というような考え方を含め、私にとっては依然として「個人」の解明、つまり個人による社会の可能性に対する理論化の範囲内に属します。かつて、「一見の客」と「馴染みの客」のような視点で論文を書きましたが、「現代」という括りにおいても、それほどわれわれの学説史的焦点について変えざるをえないということは無いように思います。

Eさん、この個人の可能性の経済学的考察というテーマは、後に別の形でわれわれの問題意識に立ち返ってくることになりました。この点は後に触れるとして、先にもう一つの立場について、つまり3)の二重の社会像に関して振り返ってみます。これは結局原理的世界の抽象性(度)について、その程度が学説的發展に対応してくるのではないかという観点でした。スミス以降マルクスを含む古典派、あるいはその後の経済学理論の抽象性に関係する社会像の設定の問題としてもよかったのですが、これは主としてスミスとマルクスに関して取り上げられるという結果になりました。

私の理解では、学説史としてはこの3)の立場がもっとも具体的でまた一つの方法たりうるもののように思えました。実際、理論と社会像ということではかなりの程度歴史的な視点を踏まえ、学説の特徴を明らかにできるでしょう。しかし、体系の成立過程ということになると、やはり統一の一貫性という側面は欠けそうです。新古典派あるいはシュムペーターもケインズも可能なのですが、統一的な説明ということになると無理ではないかということです。

実際、この「二重の社会像」は、時永先生が論文をお書きになり、それを巡り議論をしたのですが、当初の熱心さの割合には、それ以上われわれの中では関心は深まらなかったように記憶しています。もっとも、それぞれEさんを含め当時書かれた論文には、この社会像に関連した議論が展開されていましたので、まったく発展しなかったとは思っていません。ただ、スミス及びマルクス止まりであったのは残念でした。このあたりの論点は、今でもいろいろな切り口で学説史を楽しめるのではないかと想像するのですが。

学説史を楽しむというような側面では、われわれには幾分反省点があるように思えます。

どうしてそうなったのかははっきりしませんが、われわれはいつの間に

かスミス中心グループとリカードゥ中心グループとに分かれる傾向にあり  
ました。その結果、学説史を時代的にももっと先へ進めるインセンティブ  
に欠けることになったのではないかという反省です。私などはもっと早く  
1930年代の議論に進んでいなければならなかったということになります。

おそらく、われわれがこうした傾向になりがちであったのは、時代的動  
向に影響されたためでしょう。スミスはどうしてもモダンに対して感性的  
なところがあり、リカードゥの場合にはロジカルな性格がきわめて強く、  
体系成立過程という点で魅力的でした。しかし、私にとってリカードゥは  
そう長く留まる対象のように思えませんでした。思い出してみると、時  
永先生も学説史研究という点では、リカードゥについてそれほど多く時間  
を費やしたわけではなかったのではないのでしょうか。

Eさん、ご記憶でしょうが、私たちの議論が古典派に傾きがちであった  
のは、また別の理由がありました。どうもこれはいつの間にかわれわれの  
無意識的なスタンスになったのかもしれませんが、いわば前線の議論がい  
かにも生々しく、それに振り回されたくない、あるいは学説史というのは  
前線用の兵器ではないということであったかもしれません。

ここでやはり思い出すことがあります。まだドクターでのゼミだったと  
思います。

われわれは当時、重商主義と資本形式論とを関連させて議論していたの  
ですが、幾つかの論文も書かれ、そのなかで資本形式論と貨幣の価値尺度  
機能について特に問題にしたことがありました。H先生のゼミであり、  
原理論系の議論にちょうどよい機会でした。しかし、そのゼミはかなり拍  
子抜けの結果でした。要するに学史の発想と理論の決め方は違うというこ  
とに過ぎませんでした。というより、H先生の発言をそのまま表現しま  
すと、「この方式の論文は、まだ頭が十分働かないときに読むと、幾分関  
心をそそるものだ」というわけです。

これは、いわば縄張りの問題だったかもしれません。しかし、その折に

私を感じたことは、学史はパラダイムを意識し、学説主張者の理論形成過程を相対化するところがあるわけですが、抽象的な次元への一元化を追及する原理的思考は、可能な限りそれを濾過しようと努めるわけです。したがって、「頭が十分働かないときに読む」というのは、意識的発言だったとも言えるわけです。

とはいえ、濾過しようとする側は、逆に強烈なパラダイム意識が働いているということになりましょう。われわれの方は、可能な限りそれを相対化しようとするわけですから、現実的にはそれぞれの立場が入れ替わることになっていたかも知れません。そこで、これも常々感じてきたことですが、われわれのような学説史的方法を議論していた者たちにとっては、パラダイムの構成要素ともいえる思想、歴史あるいは論理思考そのものに対してある種情熱を持つということにはなり難かったと思います。

Eさん、われわれが実際にそう感じ、かつまた周辺の人たちもそう評していたのですが、時永先生が同世代の中で年長者であり、また「ベッドの上の青春」を余儀なくされたとしても、やはりヘーゲルのように年寄りくさかったのは、学史研究を運命付けられていたし、その方法論を体現するようなところが思想的にあったと言えそうです。そのためでしょうが、先生はよく学問の節度ということを強調されました。結局、これは、パラダイムを相対化する学問的方法に由来すると理解してよかったのだらうと判断しています。

ご存知の通り、私は時永先生の方法論を基本として、スミス、リカードゥ、マルクスというきわめてオーソドックな学説史研究を進めたわけですが、ケンブリッジ経済学の始祖としてのマルサスという、ケインズの指摘によるわけではないのですが、T. R. Malthus と C. Darwin とを背景に、個人に対する組織あるいは機構的ファンクションの側面を、学説史的にフォローする必要があると A. Marshall などを取り上げて研究に手をつけていました。

もちろん、スミスともども関心の高い F. A. v. Hayek についても関心を持ち続けてきました。これらは、私のそもそものテーマであった、個人に埋め込まれた社会形成能力を学説史的に明らかにするというに由来しています。もちろん、これはスミスのテーマであったわけですから、彼のテーマをただ私が延長してみたいという単純な動機によるものだとしてよいのでしょう。

### 3 個人の可能性

Eさん、少し長くなりますが、もう少々お付き合いください。

スミスの先に言及した「本源的購買貨幣」のところに立ち戻ってみたいと思います。方法論もそうでしたが、われわれは宇野先生の問題提起をいわば出汁とし、そこにわれわれの材料を加えていくというような議論を行っていました。スミス重視グループにとって単に彼の価値論の性格について云々するのみならず、その後の学説の発展に対するエンジンのような概念規定を行おうとしていました。先ほどの3通りの立場も、このようなことに必要な視角だったと言えるでしょう。

「本源的購買貨幣」という表現そのものは、スミス固有のものではありませんが、われわれは、ここにこそスミスとその後の経済学の展開の根源的秘密があるように考えていました。現代風に表現すると、いわば経済学の Big Bang に相当するものだとして位置付けていたことになります。truck, barter, and exchange を本性とする人間の根源的能力が、このコトバに秘められていると見たわけです。

私は、先ほど触れましたように、スミスについて、徹底的に個々人を対象とし、そこから社会の可能性を明らかにする理論の構築者であると捉えていました。われわれの議論が、「本源的」をめぐる活発になっていた頃、これは宇野先生の晩年のお仕事では最も重要なものと思えますが、「恐慌論の課題」という論文が出ました。

Eさんの記憶ではいかがでしょうか、この論文についてわれわれはとにかく拘り続けました。他の宇野先生系統の研究者がこの論文について、長期間それほど活発な議論を続けていたようには記憶していません。派生的な議論は多々あったかと思いますが。

宇野先生がああ時期、なぜ「課題」を書かれたかははっきりしているように思えます。おそらく、宇野先生は、労働価値論の論証に対しまったく革新的な議論を提示したわけですが、ご自身の考え方について最終的でかつ積極的な主張を示そうとされたのだと思います。

つまり、労働価値論は資本の生産過程で論証されるべきであるという見地では、まだ不十分であるということだったと思われる。価値論論証の主体となる労働力について、いまだ明確な規定が与えられていないと気づかれた。そもそもこの論文は、表題が「恐慌論の課題」とされながら、そこでは特に恐慌を巡る議論が中心をなしてはいないという奇妙なものでした。論文の主たる議論は、「労働力商品の価値規定」に焦点が当てられていると読める内容でした。

Eさん、多くの人たちの関心がどうであったかは、さしずめどうでもよいでしょう。私にとって最初に目を通した時にはこうした印象でした。宇野先生はすでにご自身の『原論』を完成され、価値論の論証について多数の論文を書かれていて、この領域は、他の領域に比較し相当完成度の高いものだと理解していましたから、何でいまさらという感を免れない作品ではないかという疑問でした。

しかし、疑問を持ったからこそ丁寧に読み直したということですが、改めて宇野先生の粘着力のある思考に驚嘆したというのが実情でした。労働力商品の価値規定に不可欠な生活手段の質と量についてどう規定するかというわけですから、宇野先生にとっては価値論は未完成であったということになります。

われわれがこの論文に惹かれたのは、景気循環と価値論との関係にまったく新しい考え方が提示されているという側面だけではなく、むしろここにスミスの提起した「本源的購買貨幣」につながる経済学的发展を見たからだったと言えるでしょう。「買戻し」というコトバを使いましたが、スミスの「本源的購買貨幣」と見事につながる原理的なコンテキストが発見できたという気分でした。買戻し関係という点については、もちろん、われわれはかなり早くからスミスの議論に当てはめていました。したがって、そのこと自身に新たな意味があるということではなく、要点は景気循環と生活手段の質と量との関係の方にありました。

もっとも、これはわれわれがそう思いながら結局詰めた議論をしませんでしたが、ここまできると、すでに宇野先生の議論は、はるかにマルクスの範囲を超えていて、労働価値論の論証という類のものとは異なってきており、全面的な価格機構つまり市場経済の秩序・収斂機構の原点を明らかにしているというように感じられました。ここら辺のことは、もっと積極的にやっておくべきでした。私の記憶では、この点はEさんがもっとも熱心に指摘しておられたのではないのでしょうか。

それはさておき、これはEさんがもっとも得意にしていた領域ですが、スミスにとって労働は *toil and trouble* でした。もちろん、分業論を出発点としたわけですから、*skilled labour* が中心にあってその一面化ですから、歴史的限界だということは明白です。しかし、他方でスミスは、*The Wealth of Nations* で教育を論じているのであり、国民教育としての萌芽的視点は確実に持っていました。

宇野先生によるマルクス労働価値論批判は、商品交換による同質性の抽象という論理の難点にありました。機械制大工業の発展による労働の単純化の傾向を背景に、資本の生産過程において論証されるべきこととしたわけですが、先生は明らかにご自身の従前の主張では不十分だと考えておられたのではないかと、というのがわれわれの見方でした。つまり、交換過程であろうと生産過程であろうと、単純労働という抽象性を想定しているこ

とに変わりはなく、根本的批判にはならないだろうということです。

われわれの議論でもそうでしたが、学史的な経緯からしても、単に労働の抽象的性格に基づいて価値論を議論するというのであれば、スミスのな「一面化」から根本的なところで脱却しえていないだろうということになりました。宇野先生が、労働力商品の価値規定に「買い戻す」関係を強調されたことと、われわれが——どのような立場であったとしてもこの点は皆共通だったと思いますが——スミスの「本源的購買貨幣」を学説史の端緒とする考え方に立ったこととは、それほど意識的な関係はなかったのですが、「恐慌論の課題」では明確に問題が共有されていたのだ、という議論になったと言えるわけです。

Eさん、労働力商品の価値規定が恐慌論＝景気循環論と理論上繋げられなければならないということは、原理上の純粋資本主義社会に可能な歴史的発展の性格規定の根本がそこにあるという点と関連付けられているからであったと思います。古典的世界に対比すると、いわば自然史的な発展の描き方と、その社会に内在する歴史的発展の性格規定との相違ということになりましょう。

宇野先生の「恐慌論の課題」は、労働力商品の価値規定を通じて、その歴史的発展の独自性を明らかにしなければならないとしました。つまり、労働力商品の再生産に必要な生活手段の質と量（労働力商品の価値規定）が、労働力商品の需給関係に基づく景気循環と、この景気循環という独自性の下で現される資本主義社会の歴史的発展を担うにたる労働力のあり方によって決定されるということになります。この発展を担うにたるというところに、生活手段の質が考えられているわけです。

しかも、当時もそして今もそう判断しているのですが、この質の規定に関連させ制度的な枠として国民教育の普及を指摘していることはきわめて重要であるということです。今日風に言えばヒトの能力＝人間力ということになりますが、これを無視した人間社会の歴史はありえないでしょう。

スミスが「本源的」(original) というコトバを用いたことに通じています。

スミスの skill and dexterity としての労働が、機械制大工業の発展による単純化＝一般化として強調されたのですが、じつはこれは同時並行的に普通教育＝国民教育の普及として、全般的な知的水準の向上が計られ、その一般化が実現してきたことはきわめて重要だったはずでず。しかも、資本主義の歴史は、この国民教育における水準の向上を実現しつつその発展を進めてきたわけであり、この傾向を無視した理論は基本的に無理だという議論でした。したがって、資本主義の発展に対し個人の可能性を否定した議論もほとんど非現実的だといって差し支えないでしょう。

#### 4 お便りの終わりに

Eさん、われわれは20歳代の後半から付き合いを始めてかれこれ40年ほどになります。不思議なもので、仕事の最終段階で同じような立場にいます。しかも、それぞれ母校で最後の勤めということになりました。Eさんもひょっとすると同じなのかもしれません、この時期、この時代に何故このような仕事につくことになったかについて、ある種感慨がありましよう。私について言えば、この大学で育ったものとして、自分の義務を果たそうということに尽きるかもしれません。この場合、私が義務と言っているのは、同じ思いかもしれませんが、母校の未来の可能性に対する義務ということになりましよう。

もちろん、この可能性はここで学ぶ学生諸君に対するものです。私にとってもっとも辛いことは、ここで学び社会に巣立った卒業生の中に、依然として母校に対し心を閉ざす場合があると聞かされることです。その心を大きく開くことが、私たちの表現しようもなく重い責務だと思っています。われわれは大きな可能性を秘めた素晴らしい若者の教育を引き受けています。彼らの希望が閉ざされるようなことがあってはならないでしょ

う。

長い間大学に身を置いたわけですが、われわれはあまりにも日本の高等教育に対して無知だったように思われます。無知というのはやはり恐ろしいことでして、そのための結果に対し、何層倍かの力を用いあるべき姿を実現しなければならないというということになります。少子化という圧力——外圧と言いたいところですが——を受けながらですから、一層重くなります。

もっとも、Eさんも同様だと思いますが、このような時代であるからこそ可能だという側面もあります。われわれは、社会によって評価されなければ存続しえないのであり、幸いにしてその評価が公的に義務付けられたり、社会が多くの評価軸を設け大学評価を行うことになっています。毎週あるいは毎日といってよいほどこうした情報が伝えられています。ご存知の通り、そのためにかの「象牙の塔」というコトバも表現的には死語になったように見えます。

昔われわれのまわりで聞こえた懐かしのサントーブーヴによるコトバのようですが、19世紀、20世紀を越えて伝えられてきたコトバであり、今日でも背景を変えれば、コトバの精神からすると必ずしも死んではないのかも知れません。いや、Eさんも日々実感しておられまじょうが、もっと異形に変身し聳えていると言ってよいのだらうと思います。もっとも、聳えている側は己をそのように意識はしていませんから、その方から眺めると、ドン・キホーテが何やらロシナンテともどもモノ申しているということになりまじょう。

以前のお手紙でも話題にしましたが、そして最近ではEさんも常日頃それを思考しているとおっしゃっていますが、われわれは竹内洋教授の指摘する日本的教養主義の只中で知的訓練を受け、われわれの道に進んだといえます。したがって、異形であり巨大に映し出される影塔に対しても、ややシニカルに表現しますと影で影を裂くというような振る舞いにしか過

ぎないのかもしれませんが。

それにしても、同様の感想をお持ちでしょうが、われわれは学説史という多様性に恵まれたフィールドを持つことができました。どのような学問であれ、そこには豊かな土壌が培われているとしてよいのはもちろんのことです。しかし、学説史はまさにその多様な土壌をフィールドとして仕事ができるわけですから、とても恵まれた学問だといえます。したがって、悔やまれることだけがはなはだ多くなるわけですが、そこで豊かな実りを実現させたか、という声がいつも聞こえてくるような気がします。

Eさん、これもまだ判断できない部分になりますが、われわれがこうした人生を選択したゆえんということになりますと、やはりその判断を可能にするパラダイムと無関係ではありませんでした。学説史に強く魅かれたのもまさにそうであり、この仕事を選択したのもまったくそれによるものでした。

先程申しましたが、学説史はパラダイムを相対化する、したがってパラダイムそのものを意識的に対象化する性格にあるとしました。学説史の方法論も、そのような立脚点から提起されたとも考えられます。スミスの学説が、いまだわれわれにとってきわめて新鮮であるのも、またマルクスであれマーシャルであれあるいはハイエクも然りですが、同様に興味の尽きない対象であることも、まったくこの学問のゆえだといえます。

ということなのですが、Eさんが講演されるときに、その新鮮さが何より重要な気がします。そこが明確ならば皆さんは大いに関心を示すはずだと確信しています。

さて個人的なことを申せば、過去をたどるとなぜそうであったのか分かり難い事柄も多かったのですが、そうしたことについては、今度お会いした折にゆっくりお話をしたいと思っております。

小生自身は、Eさん同様（否、それ以上と言いたいところですが）自身の母校への誇り、学生諸君の高いプライド、卒業生の熱意によって生涯を

括りたいと思っています。またこれもお会いしたさいの長話にいたしまし  
よう。